

[oricon.co.jp](https://www.oricon.co.jp)

74歳・島耕作、社外取締役役に 作者が新作の構想語り“隠居”否定「余力を残して、次のステージに」

アニメ&ゲーム

人気漫画『島耕作』シリーズの新作『社外取締役 島耕作』が、24日発売の『モーニング』（講談社）17号より連載がスタートした。同誌では、作者・弘兼憲史氏が、現在74歳の主人公・島耕作や新シリーズの構想について語っている。



新連載『社外取締役 島耕作』が掲載された『モーニング』17号の表紙

[写真ページを見る](#)

初芝電産からテコットまで、52年の会社員生活を終えた74歳の島が次に選んだのは、社外取締役。前作、『相談役 島耕作』の連載終了の際、島がテコットを勇退するということがニュースとなり話題となった。

このことについて弘兼氏は「定年前に左遷や出向で会社を去る者もいて、一握りのスーパーな

人たちが島のように社長、会長と上り詰める。うまくいった人も、うまくいかなかった人も、島の会社員人生にご自身を重ねてくださったのではないのでしょうか」と分析する。

島が入社したのは1970年。そのころに就職した「団塊の世代」にとって、終身雇用制で、一つの会社に忠誠を尽くすのが当たり前だったことにも触れ、「普通の人はこんなに長く会社にいられない。60歳定年、再雇用で65歳まで残る人が少しいるくらい。島はそれよりも10年近く、会社にいた。ここまで長くいさせてくれてありがとうという気持ちです。だからこそ、テコトをスッパリと辞められたんです」と新連載について説明した。

また、自ら退く決断をした島についても「会長や相談役ともなると、周囲からの提言も少なくなります。それに自ら退かないと、後がつかえている。ただ、財界活動はするつもりです。仕事から完全に離れて隠居するのではなく、余力を残して、次のステージに進みます」と伝えた。

島耕作は74歳。「私自身も74歳です。この年になると、周囲の経済人も社長、会長、そして相談役へと肩書が変わっていく。一方で、元気なうちに新しいことに挑戦したいという思いもある。社外取締役であれば、自分の知らない業界で、自分が見てきたもの、培ったものを提言することができるのではないかと考えました」と新連載への思いを語った。

1983年から現在まで同誌で連載されている『島耕作』シリーズは、サラリーマン島耕作の出世を描く人気漫画。課長(83年)、部長(92年)、取締役(02年)、常務(05年)、専務(06年)、社長(08年)、会長(13年)、相談役(19年)となっていた。